The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	北東アジア民族学史の研究 ： 江戸時代日本人の観察記録を中心として
Author(s)	加藤, 九祚
Citation	大阪大学, 1983, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33575
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【1】

氏名・(本籍)	加藤九祚（かとうきゅうぞう）
学位の種類	学術博士
学位記番号	第 5915 号
学位授与の日付	昭和58年3月3日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**北東アジア民族学史の研究** **—江戸時代日本人の観察記録を中心として—**
論文審査委員	(主査) 教授 甲田 和衛 (副査) 教授 田中 清助　教授 青木 保

論文内容の要旨

本研究は江戸時代における日本人の観察記録を視点の中心において，18—19世紀の北東アジア民族学史を研究したものである。このような試みは日本の内外を問わずはじめてである。

私がここでとりあげた日本人の観察記録はつぎの4点である。すなわち，伊勢の大黒屋光太夫と桂川甫周の共著になる『北槎聞略』，仙台の津太夫と大槻玄澤の共著になる『環海異聞』，中川五郎治の『異国雑話』，間宮林蔵と秦貞廉の共著になる『北蝦夷図説』である。そして対象とした北東アジアの民族は，上記の書物の中で主として記述されているアレウト族，カムチャダル族，ヤクート族，ツングース族，ギリヤク族の5つである。

私が以下の研究において目ざしたことはつぎの事がらである。

1．上記4点の日本語で書かれた資料の民族学的記述の内容を，ロシア語その他の諸資料によって比較検討し，その学術的，資料的価値を明らかにする。

2．これによって外国人の研究を日本に紹介するだけでなく，江戸時代日本人の業績を民族学的資料として研究に導入し，諸外国の研究にも役立たせる。

3．あわせてシーボルトによる『北蝦夷図説』のドイツ語訳を可能な限り再検討する。

4．北東アジアの民族学史を概観し，その文化的相互関連を明らかにする。

本研究によって，上記の江戸時代日本人の観察記録が北東アジア民族学史の資料として極めて価値の高いものであることが証明されたと思う。中には彼ら以外のなんぴとも指摘していないデータも少なからず含まれている。なお私は本研究において，日本ではじめて，津太夫の上陸地がアツカ島であることを明らかにした。

私が本研究を通じて留意した北東アジアの民族文化の相互関連についても，一定の成果を得たと思う。例えば熊祭りについて，文献資料によってギリヤクとアイヌの比較を行ない，いくつかのディーテルにおける類似点（例えば解体のときの毛皮の切り残し）を見出した。

ツングースの章では２つのエクスカーション的論文を付録としてつけた。このうち朝鮮の壇君神話については，これまで誰もとりあげなかったタンクン＝タルカン（タルハン）説を提出した。

シーボルトによる間宮林蔵報告のドイツ語訳について言えば，そのすぐれた価値と果した役割は偉大であるけれども，現在の研究水準に立った新訳が必要であることは疑いをいれない。このことも私は本研究において明らかにしたつもりである。

論文の審査結果の要旨

本論文は，北東アジアの諸民族について，18～19世紀の日本人の観察記録を中心として，民族学史構築の基礎を樹立しようとした研究である。

本研究は，桂川甫周編「北槎聞略」，大槻玄沢編「環海異聞」，中川五郎治著「異国雑話」，間宮林蔵・秦貞廉共著「北蝦夷図説」において，とりあげられたアレウト族，カムチャダル族，ヤクート族，ツングース族，ギリヤク族を対象とする。換言すれば，江戸時代たまたま難船等でシベリア北東部に至った光太夫，津太夫，五郎治の観察記録，ならびに，意識的にその地方を探検した林蔵の業績を民族学の視点から綿密に検討し，その時期のロシア人北東シベリア研究者，さらに現代ゾヴィエトの研究者の業績と比較参照，補正した。

アレウト族の衣食住についての光太夫，津太夫による観察は，ベーリング探険隊のステラーとワクセルによる記述と並んで，当時の水準としてきわめて詳細，正確であり，カムチャダル族についての光太夫とクラシェニシニコフの「カムチャッカ誌」との対比，さらに光太夫のヤクート族シャーマンについての観察は，アルタイ族と共通であることをラドロフによって裏づけることが可能である。ツングース族についての津太夫の弓射の記述，五郎治の犬橇の伝播についての指摘，ギリヤク族についての林蔵の著述は，シュレンク，ひいては，現在のタクサミ，スモリャクなどによる本格的研究のまさに先駆的業績ということができる。

本論文は，これら諸民族の記述を通して，津太夫の上陸地はアッカ島であり，光太夫によるカムチャダルの衣服の招来など新事実の発見とともに，ツングース神話と朝鮮の壇君神話，Tarkhan—Targanj—壇君の伝播経路，あるいは熊祭りのギリヤク，サハリン・アイヌ，北海道アイヌとの関係の推定など，大陸諸民族間の文化的相互連関を志向する。これらの点で，本論文は，北東アジア民族学史全体の完成をみるにいたってはいないが，少くともその基盤の構築を完了しているということができる。

これまでに省みられることの少なかった日本人の異民族観察記録を北東アジア民族誌に位置づけようとした成果は，新しい北東アジア民族学に貢献するところ大きく，したがってこの業績は学術博士の学位に十分に値するものと判定する。